



北京市 西城区 護國寺街 小学生と風

幼児の心を大切にせよ

子供の心には曇りがなく純真で可愛らしい。天真爛漫な子供の群れに囲まれ、子供達の歌声を聴き、お遊戯のしぐさを見ると、胸が熱くなり、忽ち子供の時代に引き戻される。古人は、「性善」だ、いや「性悪」だと論争した。この視点から、今日の社会主義制度下における児童を見ると、春秋時代の荀子が述べた「人性皆悪」の説よりも、孟子が説いた「人は生まれながら皆善性である」のほうに当然であるが賛同したい。児童の心は純真であり、いたわり、充分見守って、子供たちを健康的に成長させよう。晋の傅玄が述べている。「朱に近づけば赤くなり、墨に近づけば黒くなる。」この言葉は誰もが知る諺になったが、現在の言葉で云うと、児童の心に決定的な影響を与える要因は、社会の環境である。児童が成人して、有用な人材に育つか否かは、どのような教育を施し如何に養育するかにかかっている。

児童に影響をあたえる社会環境は、つまるところ社会政治制度に係っており、具体的には家庭、学校など各方面と密接な関係がある。父母、先生、兄弟、姉妹、親戚、友達、隣人などは、常に子供に接する機会があり、程度の差こそあれ、必然的に児童に何らかの影響を与える。幼少であればあるほど影響は深刻で、成年以後の思想や生活習慣に影響する。最初は愛憎を知ることから始まり、自己の性格を形成するに至るが、この過程は極めて複雑である。



孟子

子供のためのより良い環境を求めて、古代人はすでに生活環境の選択に意を払っていた。環境が悪いとすぐそこから引っ越した。孟母は「其の居を三遷」した。現在の常識からするといろいろと批評もあろうが、孟母は敢えて三度も引っ越しをおこなったのは、我が子、孟子のためにより良い生活環境を捜し求めた結果であり、この母親の心理はよく理解できる。

この事実は、孟子の母が、子供教育の道理をよく心得ていたことを物語っている。漢代の韓嬰が『韓詩外傳』でこう書いている。「孟子少（わか）き時、東家 豚を殺す。孟子其の母に問いて曰く、「東家 豚を殺して何を為すや？」母曰く、「汝に啖（くわ）さんと欲す。」其の母自ら悔い而して言いて曰く、「吾是の子を懐妊して、席正しからざれば坐せず、割（きる）こと正しからざるは食わず、之を胎教するなり。今適（たま）に知る有りて之を欺けり、是之に不信を教えたなり。乃ち東家の豚肉を買いて之に食わしむ、欺（あざむ）かざるを明らかにするなり。」この故事はあまりにも有名で、多くの人のよく知るところである。曾子の妻にも同じような子供を騙した話が残っており、妻は曾子のために豚を殺し、子供にうそを教えないことを誓った。

この類の故事は多い。宋代の邵博の『聞見後録』の中に有名な話がある。「司馬光曰く、「光 五六歳の時、核（くる）桃（み）を弄（もてあそ）ぶ。女兒其の皮を脱するを為さんと欲し、得ず。女兒去り、一婢 湯を以て之を脱す。女兒復（ま）た来たり、核桃を脱せし者を問う。光曰く、「自から脱すなり。」先公適（たま）たま之を見る、呵（しか）りて曰く、「小子何ぞ漫語するを得ん！」光 是より敢えて漫語せず。」司馬光は自分の経験を、うそをつくなという教訓として、後輩を指導した。この故事は、子供の教育の指針として、今日でもまだ十分な価値がある。この外、古人が子供教育に特に意をはらったのは、罵らない、癩癩を起さない、この二点である。同様に注目してもよいだろう。明代の蘇士潜は『蘇氏家語』という書に、次のように書いている。「孔子家の児は罵ことを知らず。曾子家の児は怒ること知らず。以て然る所の者は、生れ而して善く教うるなり。」今の家庭では、罵る、人をぶつ、癩癩をおこす、当たり散らすことは、教育上よくないことは誰でも知る所であるが、その昔は、孔子のような「聖人」の家の子にして、始めてこの道理をわきまえていたという、そう思うと、今人は古人より進んでいるということだ。

今の児童少年は、多くの分野で驚くべき成果を挙げ、古人を大きく上回った感があるが、さらに現在の父母や先生たちにお願ひしたいのは、児童の幼い心をいとおしみ、子供の生理発育の時期にあわせて、必要かつ正しい教育を行って頂きたいことだ。児童の生理的発育期は智力の発達期でもあり、本来は両者が相適応するべきである。単純に六歳以前を幼稚期、六歳から十四歳を童年期と定めることは、明らかに妥当でない。もっと小刻みに、乳児期、幼児期、童年期、少年期等の生理発育期の情況に合わせるべきである。この点さらに研究し保育と教育環境を改善して、次世代を担う若者の成長がなお一層期待できるようにしていただきたい。

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

「珍爱幼生小的心灵」ひとそえ

第14話に続いて若者や子供等の次世代への教育について語り、親の世代へ参考とする言葉を綴っています。『燕山夜話』を連載していた1960年代初頭、鄧拓は既に50歳、未だ50歳。第15話の書出しは、晩年を越後で過ごしていた良寛和尚の「この子らと手毬つきつ遊ぶ春」の歌を思わせる穏やかなものです。

鄧拓は知識人階級の旧家の伝統のなかで、幼少から經典詩歌を学ぶ環境にありました。旧時代教育を決して否定しておらず、文末に年齢別の一律教育ではなく、能力個性に応じたシステムで更に効果を上げることがを提唱しています。

教育環境を整備して「後生可畏（後生畏るべし）」と称される次世代を育むべきだという肯定的な姿勢はいささか天真爛漫な印象も残します。

執筆から5年が過ぎたころには、これらの文章は毒草とみなされて、作者への批判は止まることを知らず、鄧拓は北京を牛耳る文化界の中心人物であるとして追及の対象となりました。語録を手にした子供たちは作者への「慘遭迫害」「暴地踐踏」を続け、「似一場肅殺的寒風、祖国大地百花凋零」に至ってしまったと、『燕山夜話』巻頭の丁一嵐夫人による追悼文にあります。

温かい眼を注いだ子供たちが、「恐るべき後生」と化して鄧拓を攻撃しました。そしてその隊列中には鄧拓自身の子供も加わっていたという説もあります。



鄧拓と丁一嵐夫人

井上邦久

珍爱幼小的心灵 原文

孩子们的心灵是多么纯洁可爱啊！当你走到一群天真烂漫的儿童中间去，听他们唱一曲儿歌，看他们做一节游戏，你马上会觉得心旷神怡，忽然又年轻了似的。不管古人有什么“性善”和“性恶”的争论，我们看到今天生活在社会主义制度下的儿童，对于春秋战国时代的荀子认为“人性皆恶”的意见是不能赞同的；对于孟子说的“人生皆有善性”的意见却应该表示基本上赞同。

但是，正因为儿童们的心灵是最纯真的，我们就特别应该加倍珍爱，好好地注意培养，使他們能夠得到健康的发展。晋代的傅玄说过：“近朱者赤，近墨者黑。”这已经是人人熟悉的成语了。用现在的語言解释这句话的意思，无非是表明社会环境对于儿童的心灵具有决定性的影响。因此，想要使儿童长大成人以后，成为什么样的人才，就要看我们给予儿童们以什么样的教育和培养得如何。

影响儿童发展的社会环境，从总的方面说就是社会政治制度，从具体的关系来说就和家庭、学校等各方面都很密切。父母、老师、兄弟、姐妹、亲戚、朋友、邻居等人，只要同孩子经常接触，就都必然给予儿童以不同程度的影响。越是年纪小的受影响越深，一直影响到他们成年以后的思想作风和生活习惯；由最初开始知道爱和憎，到后来形成了自己的性格。这个过程是极其复杂的。

为了使孩子能够受到较好的影响，古代的人就已经很注意选择生活的环境，如果环境不好有时就得搬家。孟子的母亲“三迁其居”，用我们现在眼光看去，虽然可以做种种评论，但是她所以不得不搬家三次，毕竟是因为她要给孟子寻找她认为好的环境，这个母亲的心理倒是不难理解的。

事实证明，孟子的母亲很懂得教育孩子的道理。据汉代韩婴在《韩诗外传》中的记载：“孟子少时，东家杀豚。孟子问其母曰：东家杀豚何为？母曰：欲啖汝。其母自悔而言曰：吾怀妊是子，席不正不坐，割不正不食，胎教之也；今适有知而欺之，是教之不信也。乃买东家豚肉以食之，明不欺也。”这个故事也是许多人早已熟悉的。还有曾子的妻子，同样因为无意中说了句哄骗孩子的话，曾子就特地杀了一口猪，表示不欺骗孩子。

这一类故事多得很。宋代邵博在《闻见后录》中记载了另一个著名的故事：“司马光曰：光五六岁时，弄核桃。女儿欲为脱其皮，不得。女儿去，一婢以汤脱之。女儿复来，问脱核桃者，光曰：自脱也。先公适见之，呵曰：小子何得漫语！光自是不敢漫语。”司马光以亲身的经历，教育后人不可说谎。显然，这些故事，在我们今天对孩子进行教育的时候，还是有用的。至于不骂人、不发脾气，在古人对儿童的教育中，同样也很注意。明代苏士潜在《苏氏家语》一书里，写道：“孔子家儿不知骂，曾子家儿不知怒，所以然者，生而善教也。”当然，现在我们一般地都懂得不骂人、不打人、不发脾气、不要“态度”，而在古代却只有孔子那样的“圣人”家的孩子才懂得这些道理，可见古人毕竟不如今人。

现在我们有许多少年儿童，做出许多惊人的成绩，远远超过了古人。但愿现在做父母的和当老师的，都能更加珍爱儿童们幼小的心灵，按照他们生理发育的时期，适时地对他们进行必要的正确的教育。

儿童生理发育的时期和智力发达的时期，本来是互相适应的。简单地把六岁以前划为幼童期，把六岁到十四岁都划为童年期，显然是不妥当的。我们应该更细致一些，对于乳儿、幼儿、童年、少年的不同阶段的生理发育状况，多加研究，进行不同的保养和教育工作，让我们的后代更好地成长起来。